

輪湖さんのこと

中嶋 嶺雄

日本には、地方都市に居住しながら、視野を世界に開いている民間の文化人・経済人・芸能人がしばしば存在していて、これらの人びとが日本文化の基底を高め厚くしている。

松本の輪湖雅祁さんもまさにその一人であって、たんに箏・三弦の指導者というにとどまらない座標で活躍されている。

その輪湖さんのお嬢様の鳥養潮さんは、ニューヨークを舞台にした「音楽造形家」として注目されており、今回、信毎選賞を受賞されたという。輪湖さんもさぞかしお喜びのことであろうが、お二人が今日あることには、今は亡き鈴木鎮一先生に負うところが多い、と輪湖さんは常々語られている。「鈴木先生に多くのことを教えて頂いたことによって親子が音楽世界観をもち、その成果に恵まれて参りました」と。

私も鈴木先生の教えを受けた一人であり、終戦直後に下横田の旧検番の建物を使って創立された松本音楽院（才能教育研究会の前身）ヴァイオリン科のいわば第一期生であるが、あの頃は生徒が使う楽譜さえなく、この十一月で満九十二歳になった母が手書きで写してくれたものである。昭和二十二年の後半になって、ようやく謄写版刷りの赤表紙の鈴木鎮一著「最新ヴァイオリン教本第一巻」が松本音楽院P・T・Aによって刊行された。

この第一巻にはキラキラ星変奏曲からユーモレスクまでが収録されているけれど、キラキラ星変奏曲は、今日のように鈴木鎮一編曲となっていないなかった。

このような過去を共有しているからであろう、輪湖さんは、ときどきお漬物や蝗いなごの甘露煮など手造りの郷土の味を東京の拙宅に届けて下さる。松本の街中（中町）の商家（薬局）に生まれ育った私にとって、蝗の味はとくに懐かしい。私も母親に連れられて、隣り近所や親戚の人たちとよく蝗取りに行ったからである。秋の稲刈りが終わったあとの松本郊外の田圃でも、その頃になると寒さのためか蝗の行動も鈍っていき取りやすく、手拭いで作った布袋が二、三時間で一杯になる。夕映えの北アルプスを背に収穫した蝗を手にして家路を急ぎ、早速水洗いして大きな鉄鍋で炒り、砂糖と醤油を混ぜて甘露煮にするのだが、やはり新鮮な蝗は大変な美味であった。輪湖さんに蝗を頂戴するたびに、そんな幼少の頃が想い起こされる。

（前東京外国語大学学長）

箏

出会い、

そして絆

箏

出会い、

そして絆

輪翹雅集

2001/9/10 刊
輪翹之友若書刊行会

厚薄

